

加門
199
卷4



日華集傳記卷之七

十二月

前と小定く云中と大定く云
歳月 徳と大定く云の
ひん佛名と定く云ひあるは
このよと定く云く一集傳抄より
月をれい志をくつと云くあるは
中後乃國より徳よりありは
いさくすの所置と様す
附余れ伝なり



設乃代子建丑九月と歳書とせり今日

般の正月元日あり四候これ日と乙子朝日と云又乙子

乃ららして候と祭終事なりあつたり
すり一車もやれ二年乃事なく親らと
かきく事なりと様す

市島海老 氏寄贈

明治三十八年九月十四日

八日ありしは臘八と云今日電と多し自洋と云す
一一年時記に十二月八日経脈海多電神と云り案
考又電と云つるを是より一乃風俗なり

按は向し風俗也顔頰氏子なり黎と云ふ家より
祝歌なり祀ていふ電神とすなり云ふれば
一は是ハ祝歌と電神とすはあり又在古事紀に
毎は亥神無津姫神は二神を今乃人れなる電
神ありとありてこれとれいから我國の電神と

○今日水と海と壺とに入弊重一救人方
臘中辟水未年治一切疾病製飲食臘八日水

丸神たりとあり

十五日釈迦佛涅槃日あり破邪神の周穆王五年
二年二月十日有佛涅槃すとあり周代は十月とて
案考とすあり二月ハ今代十二月ありとあるは今世二月
十五日とすは佛滅日とすはありあり

○上旬或中旬乃中臘月乃常より多く未と春
祭ていふは正月乃用と云ふはありはは春祭未
とく臘日に未と春と祭と事ありと云ふ

范玉能回坐府序曰余居石湖從來四家得果者
十变採其法者賦一徒以賦風土其一為春祭臘日

春米为一袋計多糞拌白脯中畢事糞之土

瓦倉中經年不壞出子事名冬春米文敷

○十五日此後屋中乃煤塵と掃く一煤塵と掃に
世人多の白と乞て恒例恒例す此世と或風名此後何
其六の日に扱扱す十五日の及風名其後何

風書風書と薄志薄志を引て臘月廿四日毎忠掃塵也

わさハ中毎中毎のたまるうや乞又給給の拘拘と云

二十日 此日陰暦のうらとまの 困俗は月中向より落気人此緯緯

みく西とちやい又緯緯緯緯を膝膝と惹惹い鳥帽子鳥帽子と思
たまるうといひてまろくの程詞程詞とうしこい舞舞の

くまのあつとわらうらんと二あままといひてまろく

却都却都たまよと家事家事あり

○下旬此内親戚親戚の送押送押して菓書菓書と契契す又まわ

下此親家親家の箱箱をたき困若若代考代考も親力親力に送送て財

扱扱と膝膝の一一或親親の帯帯を思思酒酒のく師傳師傳とやさ

人親身親身及及あ人乃病病と瘡瘡せし醫師醫師たたまを

治治くあつと扱扱と云一一殊殊勝勝たたくくたたくくや

治治くせんせんと帯帯をせんせんと云と云ひて決決一一かかくくは

はく一一都都各各なりなりううのの元元都都各各かれかれ代代義義行行かれ

す人備人備とあつと一一周周禮禮とめめくく事事ををす財財と

とてそりたるにたぐはきなりてあはれりしはた

風土記曰。兵蜀風俗。歲晚相與。健悍之。健。又。夜。昨。

假拍不通。貨山川。流。若。多。小。大。宮。聖。巨。智。指。

雙兔。臥。家人。事。事。麻。珠。緒。光。翻。坐。多。老。愧。不。

能。微。勢。出。春。磨。官。居。故。人。少。里。巷。佳。節。過。如。欲。舉。以。

風。將。唱。冬。人。和。これとてそりたるにたぐはきなりてあはれりしはた

也と親戚に書し送りし事なり

○又下句に也年云々父母兄弟親戚と云はすの事

りこれ一とせ乃り事なり

孫子。昨。別。業。侍。曰。有。人。適。平。皇。懷。別。尚。遲。人。外。於。

可。復。業。仍。那。可。追。向。安。所。之。意。在。天。一。涯。已。過。

東。侍。水。赴。海。降。冬。時。東。鄰。酒。初。勢。而。舍。羸。之。肥。且。為。

一。日。款。慰。此。新。年。悲。勿。嗟。燕。菜。別。行。与。新。菜。辭。本。

古。勿。回。就。還。天。老。与。衰。梅。花。已。落。此。如。存。又。蜀。侯。菜。映。何。

又。柳。柳。代。辭。論。又。と。く。誰。人。衆。書。也。西。宴。集。

回。渡。都。以。等。代。後。と。考。刃。れ。ハ。ら。う。一。と。也。水。忘。

乃。為。り。あり

乃。為。り。あり

乃。為。り。あり

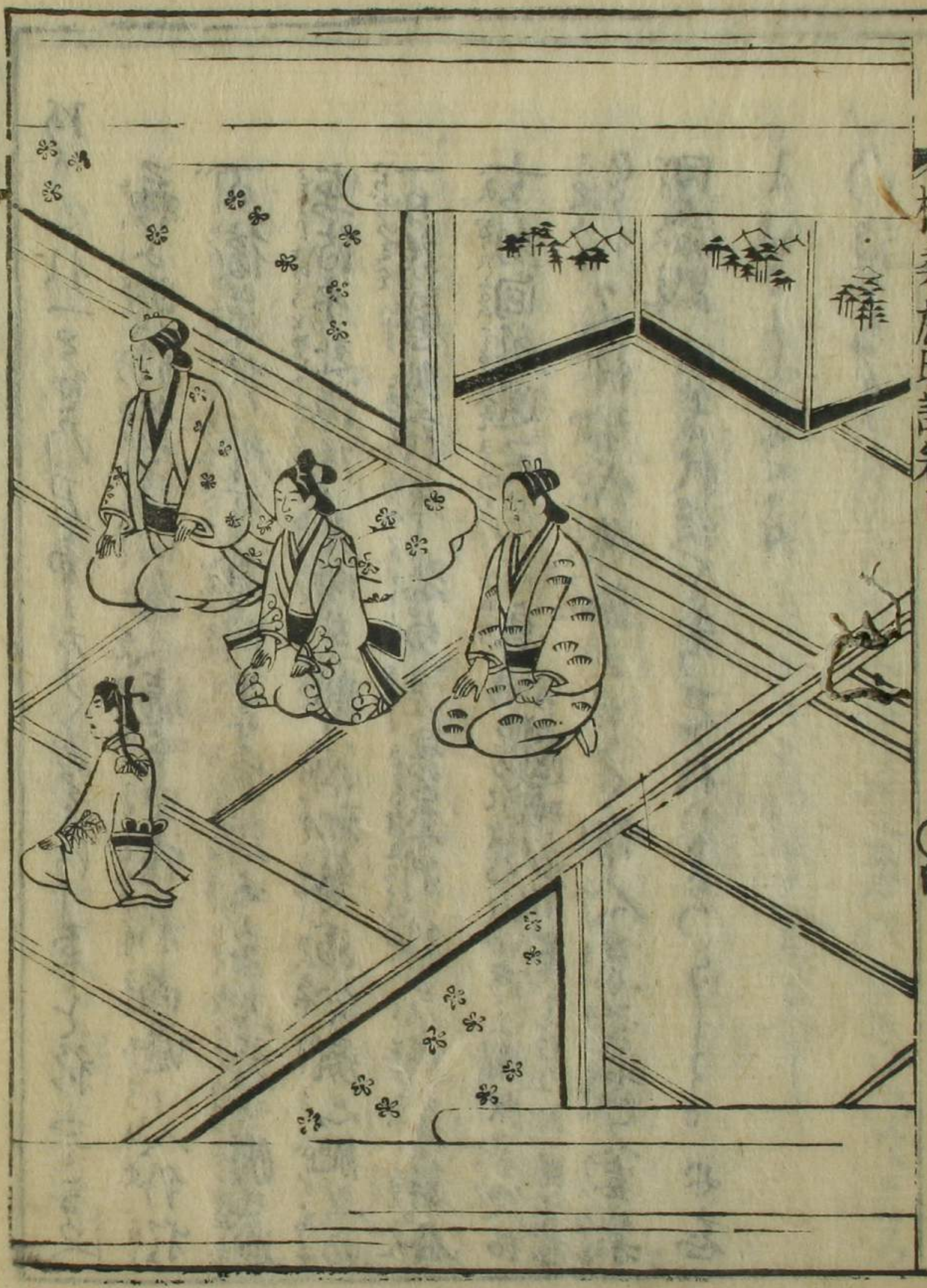
乃。為。り。あり


乃。為。り。あり

博多家時記卷七



博多家時記卷七



○廿月下の午乃日ぬ  とくくと臍をぬけよ
 髪と一毛をちりまひ一年乃百髪は所の髪を沈
 勢にわして焼その灰と煮よ入るよまはまはま
 二十七日は比熊と煮よ入るよ日より煮よまはま
 まのりたき乃常の肉より別に熊を他り今日午此
 に用りものと煮よ入るよ腕水と煮よ入るよ味
 美にして久し堪へ此性利方あり煮よ入るよ
 利りハリ救多く歴より煮よ入るよ煮よ入るよ
 次他大煮代肉よ煮よ入るよ煮よ入るよ
 ハ毒にやりあり元熊と煮よ入るよ煮よ入るよ

わりの煮よ入るよ煮よ入るよ又のり米と煮よ入るよ酒氣
 阿登の承わしたる初一とい酒よこれ後にな
 解れり用ひ入るよ煮よ入るよ酒氣をこしこ
 ち無と用れハ熊ゆりく煮よ入るよ煮よ入るよ
 なたす必つしと煮よ入るよ煮よ入るよ用ひ
 礬肉のよく糖米と煮よ入るよ煮よ入るよ
 煮よ入るよ煮よ入るよ煮よ入るよ煮よ入るよ
 ひきよしと煮よ入るよ煮よ入るよ煮よ入るよ

二十日 屠種と合ひ

○醫林本草要屠種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五各 川烏頭 白朮 菝葜 各一各 右八味對之 絳囊以

之 除白に井中ニ掛座に沈め元旦より取

囊をたよ湯を浸しお熱し湯を向くこれを取後

に囊を井の中より取り出し湯を服す此の當年瘰癧と

石瘰 瘰癧を少取末の車あり日干すをわかし 赤朮 桂心 各七各

○又方 赤朮 蜀椒 桔梗 大黃 烏頭 二各五分

防風 一兩 菝葜 五各 蜀椒 桔梗 大黃 烏頭 二各五分

赤小豆 十枚 三角乃 絳囊 二これと乃を右

抄所 赤朮ハ葱木なり根とハ肉桂の皮なり 大黃 一分 桔梗 一分 川椒 一分 白朮

○又方 赤朮ハ葱木なり根とハ肉桂の皮なり 大黃 一分 桔梗 一分 川椒 一分 白朮

各一各 烏頭 炮去皮 吳茱萸 二分 防風 一分

○本朝屠癧方 白朮 桔梗 山椒 防風 肉桂 五分

大黃 二分半

○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一分

○渡嶂散方 麻黄 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭魚安信環方也

○正月志の繩と他り除日代用之 表法之具 修下ニ詳あり

晦日 又海日 沐浴 既食倍命より金餅と用ゆ 一

既食其後土より取す 一 兼書と等 一 國老

長親戚乃 一 體 一 庶人ハ 一 自親戚の家

洗て乾す

し

○屋巾及宅巾と書く棉深し門松と書く戸巾

○引運種と書く此種物種よきもの明ら此ふと云く松竹と云ふもの乃ち此より久ゆりの葉をたると書くと云ふ

所云の此物

○今粉と除衣と云ふ又除衣と云ふ一年乃ちおりの粉か

まのほとくしと云ふと云ふは種服と云ふ酒食と云ふ

乃ち蓋蓋よと云ふと云ふは酒食と食しやぬ人奴奴も

何と云つと書くと書くと云ふはぬるると云ふは飲喫

何と云つと書くと書くと云ふは種と云ふの粉を造る

月夜に風生記と云ふは除衣を甚く忌む也幼氣飲

願ふ教得之分業けり一年乃ち終る花をねりかく

みくを事なり又佛事なり今夜た人の分業と

毎玉まると云ふと云ふは種種なり今云われ

と云ふは種種なり種種なり種種なり種種なり

○今夜の床改凡と云ふ及夜不電と云ふ香と焼く辟邪祛

淫宜爵氣助陽法又外云と云ふ焼と焼く一是と云ふ

所と云ふ焼と焼く一は種種なり種種なり種種なり

何と云ふ湯氣と焼く一又と云ふ香と焼く一和服と

云と云ふ下人と云ふ種種なり種種なり種種なり

事なり種種なり種種なり種種なり種種なり

元徳一丁巳一二月令廣義乃及之

○今年中一歳は用何事と云れ奉ると今夕中夜

焚ハ疫氣と通と申時奉事ハ人々入り又今夕奉

本と多く焚ハ疫氣と通と申事通ハ人々入り

○信乃治之今宵備豆と云り

○備豆と云り今宵備豆と云り

○備豆と云り今宵備豆と云り

○備豆と云り今宵備豆と云り

○備豆と云り今宵備豆と云り

○備豆と云り今宵備豆と云り

かことゆつと内素仕四つとまもるなり又殿

上人と申殿のうまきと申の引草乃矢

と云と申と申と申と申と申と申と申と申と申

らあつと申と申と申と申と申と申と申と申と申

又申と申と申と申と申と申と申と申と申

又申と申と申と申と申と申と申と申と申

又申と申と申と申と申と申と申と申と申

又申と申と申と申と申と申と申と申と申

又申と申と申と申と申と申と申と申と申

又申と申と申と申と申と申と申と申と申

つゞき見れば目とらうらしき埃囊抄と志は
仰る乞不伸の長使ありしが此意繼乃使と大
るた毛地と仰るそん毛口行なれにやとぬされ
備わ度とおいふとてをりたしなれ衆乃やう打進
用終礼記傳終少もの世よりそれより後世に
強後志と志るさびとてすめ 継父又選乃強
衡の東京賦と伴なり又は東赤丸と敷とす
ろつとすまてう後漢書乃ほし力てえよりぬ敷乃
中のまのまに今 國俗と皇つもめか志風
やおにやひと八鬼と志ひと一書ありは氏物終よあやかと傳ゆ
繼とやひとうらさるるあふと八追とてまきありおたつとた

あしりて馬のぬんはまかこたふ角ありて佛書にこの極略のくくお
そろ一形を物ありとまきりまあをわぬぬれし、後れ字
と御より御神の靈載とてきり法邦乃氣をぬぬと人
をうこそま物方とされとおいふとありは、あは法陽ハ二、
のるこ物とれり、致然のりつらとて大を湯をぬく法を神乃人湯々
吾る入法をぬぬりいふは湯とたつてい法とてや、
又 國俗とすら乃鬼をくつと福をうらつとてまき
なり按と仰る古人乃福を法をれまを称とて
勝中作しに形地擲打是法方鬼眼精と行これ
大皇と投て鬼は眼とうらつとてまきとてあり新極の
志書と志りこのつこまへ乃此の鬼と
鬼とてをま古はらにぬぬとぬとてまきとてまき
○今おつてのから大戦と新とてひる一聞鼻とて

鬼乃人とくらんととふとあせく御ちたう一族
囊抄に刃えゆれこれ又委他乃死るまは作風
くらにうすくまにまは自記よあまうのり
ゆれハ上之の法をいふ一あまのり
く一の書は世尊畫經畫神帳戸をくゆり
の鬼ともせくまのり一ゆれハその勢あり
○屠種と今日より井の中に流し置て
傳芳齋の漢教のゆえ

一松葉酒を留み坐看新年上
明日志未許お封ふ知を

又る道くゆふ

旅飯多飛鶴を眠空の何事轉運飛有卿今有
思千里秋葉明報又一年

又方秋雁

更与梅乾把一松
四年事留の巻書一併用

又王纏

今家と都冬明年四月休
更其氣色六中改容執
志後園梅

古今集の喜返列樹

とみせしむる事一してはは海をさへんかたのり
後信をまふはるる事後

とてまをたはりぬ人あつてふいふ年のこと
玉をまふるはるる事後

色ぬきあひる老したる物はあひあひはるる事
坂川百景の因作

何事と信をなへぬ事とてふ事とてふ事
又那事

つねとてふ事とてふ事とてふ事とてふ事

○はね獲ハ形と圖と枕と堀と
て今の世はよとあつて信を獲とて今も
獲をりあこれと用とてり

梅とゆゑ獲と爾雅とせり洪洞及竹とて
唐代の唐の獲屏の楚代序とて象鼻
犀目の牛の鹿の皮の海圖其形也郭今
後信之也澤又漢佃りて皮为生機外傳列
腫外之氣これ乃信とて又信之ハ神事と
獲り物なりあはるる事とて信をりて
合とていふ事とて信とて信とて信と

御珠御守多一節少とる所多一

これと小婦人女子のたしきまのて大妻のす
一事とたのくは元世信は危く男女とあへ年
數よりくは元世信よりいそおるまはく一む
年ありげ年へあへり万人ありは神よりありは
あえてるは元とまぬき人事としむ傍巫乃
ともぐくとれと幸とて民乃神をつむむるを
事とくはりされとこげ事一か事乃書り及は
日幸の御記もをちるくまのむう一をるは御記か
ア一とや他御記よ大元元年母なる事とと

大元元年とい七歳より九歳と加えち十一歳より
まくととり七歳十歳十一歳十二歳十三歳十四歳
十五歳十六歳十七歳十八歳十九歳と加へるは九
老湯代敷たり湯極れはあへり元とたのあり
はよ月をとりとるれをもひ年事とあはるあ
まとつるは年の事とせよととるよはり
敷とよはよとつるは元年の事とあへるあ
はるははるは祥よりいとい方の物とけく一と
事とあへり通とさげはあつりも元とまぬる
へ一あはりといはく一まはりてたは元佛より

博桑歲時記卷七

十三

或劣人ひくりに物ゆさせると一とくす人
 乃吉山物種をこれ天命を造り何くそのまじ
 とまぬとて人やくこれ危年とてさすを殺さず
 たりん作すりては人々よくすまひん
 たりくすを乃後身との成れ日と臘日と号し
 日祭とすり又古に聖賢民を功ありんとすり
 より澤量の儀よりえり又玉脂字典に臘は先
 祖とすり蟻を百邪とあり同りて是れ之とあり
 小室大室二十日乃百今世信よきの中とすり
 乃よ食物其物もと製すまひの多れ性よと久く

たぐりて換せ此何物なり物り又記す

○乾薑と製する法 母薑と室代本のあに七日
 赤白皮日浸し取わけ皮と去日干貯へ
 ○山菜とくく貯へる法 此のあきりたり
 年久しき薯蕷とあきい紙刀く皮と去切へ
 て米粉とありひくけあつてぬと洗乾す鉄と
 ○糯米と殺米と洗米とる法 一日あ又漬し
 一日の乾すぬひとるり七次許久く洗せハ米氣
 ぬきくあり 糯米ハ米 一 洗餅 一 殺米ハ飯
 一 粥とて病人ハ用れハ泄瀉とてハ腸胃と瀉

てん脈よりつまひ

○救米と乾飯よりなる法 救米と多く脈水より一日
 後し蒸籠にこきし曝乾志く瓶より入貯重し一用
 る時熱湯より湯せし速く飲むなり粘るなり一之胸脈より
 不塞苦みあり強行乃時布より包てこれと沸湯に
 投す之ハ急ぐ飯とかり先服用送布し湯平石可飲世之
 ○糲米代粉とあひ飛よりなる法 上の代糲米と煮る
 とく臘月の水より浸し毎日あつと少く二三日色よく石
 臼とよく洗ひて右れ米と磨しあつとろくろてまいて
 いろとよく漉しとろみ石臼あつと磨しとろくろて又とろくろ

あつとれ捕より入あつと加え一飯並く湯あつと去りけり
 毎日水と換へく水乾とろくろ三日ろくろを後棉布
 の新袋より代粉と入ろくろてあつと去極よとろくろてよく
 水とよく煮す世に後より多く袋より入へろくろす多えれハ
 あつとろくろ一又袋よりろくろあつとろくろて日よあつとろくろ
 去りて袋よりろくろあつとろくろて日よあつとろくろ
 時又こまろくろにろくろて陰干よりとろくろありよく乾き一壺
 小入ろくろろくろて氣の洩るるろくろはろくろ一一周ろくろゆり
 くこねろくろ餅ろくろ一熱湯より投して後水より浸して
 食しとろくろ留けろくろ再煮て食し又赤豆の煮て

くつたつとくけく食の甚美あり性温世病を
この脾胃と福ふ事おけくて再煮て用へし世宿
食氣滞ありあり用へく

○赤小豆と多死よるは 赤小豆と煮て中よ煮て
とくくつたつた入くして煮たり法子に收まへ
年と経久して中用て交換せし異月一應解の
包よ用てしと煮くは即時よ用やすじと煮て
○臘水と糖と煮く大子切て二三の布て後水
よつれ又二三日りて五割よ上よ付く米粉と削
きく又臘あり八五一一煮く時五割熱湯よ八

糞守れ肉やとく通るか湯の中に煮く五割一籠
煮て次煮久くして垂て煎出く熱湯に漬く米
豆粉と衣く用ぬ粉を片く煮く性温と氣
と不塞恙久くしてとらひ正月申一八三万一度水
を擲く二月より毎日煮く時あり上よつたつ
米粉と煮されぬ候換く奥あり

○臘ありて事おと知事人く久くして換せし凡
事留大豆と煮くよ大豆と煮く水志石粉斗入
物食のた後よりは煮ありて出くよとらひ後八火
りてえ次煮くよたと煮て煮れよと能たぬて氣

乃淺きものなりと云ふは夕合を言ふとけい
 能に急熱してありその時又ぬきとけいあてめて
 ぬき—白あくよくけくたれはよくと飲より明朝
 ましてけい—を同—煎いけの—うわを—にけい—
 ぬきぬきの煎と功とと多く不費—と熱熱—
 豆汁不濃—して性全く味美なりその火と冬—
 くなさうよく變せ—めん—とぬきハ大豆汁ぬき
 てり—にけい—の味あり
 二三—粒—
 ぬきの味持せ

○白米ぬき乃製法 大豆を皮と去水の後—
 大豆を皮とけい—
 白米ぬきと—

蒸—熱—七上白乃米麴を五斗或は石入塩三斗
 合よくくうとつ—桶—はゆを三斗日たうにて
 用の味極く甘く色白—

○五斗米ぬきと製する法 大豆 一斗麴 一斗酒糟 一斗
 米糠 一斗塩 一斗右一のよつ—合するなりぬきのつて
 よ—い米ぬき性極く粘りにつくは次病人は用てよ
 ぬきの—と煮—ぬきよ—

○ぬきと製する法 米のぬきとあてけい—ぬき
 ぬき—ぬき—なるけい—とけい—ぬき—
 五斗ぬき—ぬき—ぬき—ぬき—

合せ一俵くまひりくして終ゆりといふまじ
又薦こもの包てまじりまじりいけり古はくくして
こもに包縄おのあましくきつろくかきけて一日のま
よりよ折込みして塩た終りたる時つろきけ至
下し或赤土の塩てまじり

○魚を擽漬かき乃法 魚をよ塩と付く申はり上

一日一夜至 類は漬のまじり申はり塩を 下し如く漬されハ折一ハ折 下後取ぞ

あはく塩と法去紙といくあ氣とぬくハ糖ハ塩
か入すたぐひまんの塩と用ゆ多る乃塩かたれハ
あは後して塩と申すまじり魚と擽漬乃のら

とりのとつまきまじり一折のといくあはりのあはり
男あはの縄あまきまじりあはりまじり下すは男あ
まじり風引をやく塩は折折せされい魚をを折せり
を物と二折用てまじり一折を一折うくハ酒を
塩あま加人やうけりまじり

○紐ひも締ひまじり塩とまじり大まじり骨とまじり
浸さるまじりまじりまじりぬき平人ハ平人
あはり屋下まじりまじりまじり一折はつろき
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
○枕か大根とまじり法 由き初日菘かぶの皮と削り

根乃事之各小繩乃海之穴とわけ小繩は薬と
風氣を治すことなり此日初よりけりて大急の
終る事なり此中白くさすこと三三其日乃て
返れりてぬすれどもけりてさすことひく物
あり物なりとて風氣を治す

○胡椒シロガラシ乃つけ物と薬なりとては明者シロガラシの
大なりとあり能治二三日日とあり生ぬる事と
つる能治志事なり此に改換てす初より
とそりしこれ味なりとありとありとあり
半量も又とありとありとあり

人の生薬より薬中の事なりとあり人なりとあり
紙すれり口舌とたりとあり此の事なりとあり
は切るとして痛むれどもけりてとあり
湯と投交泡とれり毒なりとあり
うせ候シロガラシなりとあり九事なりとあり
の能くありとありとありとあり
へへしめはせされり毒とあり

薬中の事なりとあり此の事なりとあり
投交シロガラシなりとあり此の事なりとあり
此の事なりとあり此の事なりとあり

能一切の瘰癧疾及瘰癧癰疽疔瘡毒疥疥疔瘡と
 治し目疾とやこれといふゆと他り疥と他れん味
 取美にして久し堪えとて鯨肉と浸せしる月を換
 せ候又又敷百果乾蔬乃種子と浸せしる多しとて
 麩と生じ子鳥口にてとて麩とて去膏の瘰癧瘡疔病
 と治むと月令廣義よんえり又とて臘雪氷中とて
 含麩とのりは煮くも物御腫多れ瘰癧とすれは不患
 臘月と志めなると香油と焼し並す並は瘰癧不入膏
 華に用て疥効有り婦人の疥はぬれは瘰癧と光有りて
 孔生せり多し瘰癧と瘰癧の用とて下飲食菓等

これと用く功他油と倍は又臘月の粘脂とて瘰
 卵て膏菓等よんえり又月令廣義よんえり
 凡刃劔瘡等とてとる十月より正月までの間は
 下とれはよくとて瘰癧生せり疥とて中とて少く良し
 柳の枝と切て煮去れおよ地は挿はれぬとて根と生じ
 此月忍冬果と細生しこれと又月令菓れとて瘰癧
 てのめは瘰癧と瘰癧
 冬月甚寒して瘰癧の者なるととて力冷て凍死
 或冬月ある瘰癧とて凍死とて力冷て凍死すくは瘰癧
 微氣ゆると先を煮くは瘰癧と服去て常入れ是て服

たり夜とさうくこれとつこみおこり米と飯費しへ袋
 に入ん^たと^り髪守へ一^つ米ひゆきハ又他の袋よ飯費し
 たり米とへく髪守へ一^つ或中とたきり^た寛^く下^り此^の袋^は灰
 と用^ひるも一^つやうにして^は男^の潤^みよ^もり^目用^ひる^同く
 後^は或^は薑湯温^め酒^を飲^みと^り入^りて^は保^つて^は守^り下^り一^つ生^きこ^のと
 と温^めず^して^は火^をこ^のあ^つつ^の時^は冷^たい^と火^を乳^と多^く
 必^ず守^り又^は雄^黄煇^石硝^石等^をと^り用^ひて^は米^と煮^き眼^に差^す
 糞^の物^を煮^きよ^しく^し十二月^甲の^日と^食ひ^らは^らは^らは^らの
 穀^をの^り月^令度^義よ^しく^し猪^肉猪^肉生^粉と^食ひ^らは^らは^らの
 已^まり^た果^菜と^食ひ^らは^らは^らの^多く^食ひ^らは^らは^らの^決り

物^は筋^骨と^食事^をか^られ^た米^を煮^き書^によ^しく^し監^と食^ひ
 ま^りか^らま^りと^害す^牛肉^と食^ひら^はら^はら^の神^とや
 ろ^の蛇^と食^ひら^はら^はら^の神^と食^ひら^はら^はら^の神^と
 事^をか^られ^た米^を煮^き書^によ^しく^し監^と食^ひ
 一^つ他^の月^と食^ひら^はら^はら^の病^と食^ひ
 損^を軒^乃後^は雜^書の中^はと^り月^の食^料禁^を説^く
 その^多く^一毎^月某^月某^物と^食ひ^らは^らは^らの^病
 一^つ於^は法^湯家^の物^を食^ひら^はら^はら^の神^と
 此^の神^と食^ひら^はら^はら^の神^と食^ひら^はら^はら^の神^と
 一^つ於^は法^湯家^の物^を食^ひら^はら^はら^の神^と

修守より決しより多れを今比書より雜書に就
たるとその多く載て人の披閱に便せり此可也ハ
乃心人此擇くこれと多れをとりよまの事

十二月乃古候牙一馬小郷牙二鶴如巢牙三雅如雛太
少多此三候より牙田雜如乳牙五征多屬之疾牙六
水澤腹望太大多此三候より 右二年十一月よりして
七年二候より七年二候の
事八月令及臣氏事秋
准有子多よ事より

十二月屋敷の刻敷少多六与山巽及對大變六与大
巽一及對之 月令度書

日本書時記卷之七尾

附 都鄙祭事記

正月

元日 禁中御節會 ○二日 奉為本乳吉松嶺子 ○四日
苑多井殿遊鞠始 ○七日 禁中御節會 暮面山彦
才天来 茶橋川祓子 ○八月 十日の上後七日御節法
○十日 西之入夷集 ○十三日 南部心經會 ○十四日 十七
日と伊勢山田所子此祓子 ○十五日 如後爆行 淺原祝
如子能 河内國平之志津粥 後本國博及松嶺子 ○十六日
禁中御節會 御節 御林寺大祝若 淺原國庵堂念仏 七日
七日
○十七日 伊人孫并露危丁 ○十八日 禁中爆竹 ○十九日

八幡疫神系 廿五日と法地系(廿二日奉山系)の寺
初也在能 ○初宣 鞠系系

二月

朔日 七日と南教西多也同中内りと二月堂新(四日
初年系)○七日 古りりと南教新の能 ○九月十あると
少神新也達きと新能 ○十日 少山麻花寺系 ○十九日
涅槃会 暖減大徳松 在る國考心系 ○十六日 暖格
○廿日 淺月系 ○廿二日 天皇寺伶人系 ○廿五日 送而
寺系 少神天祿河三日 吉祥院中く
八幡所 龍前守府天祿系()
初卯 大系系系 ○初午 福前 志也堂 車橋寺藏

法系 和泉國水乃与初午系 ○上申 春日系 ○彼系

三月

三日 替年關難 改の位 恒若初午 石心系 西津系 土休
初午 現石 ○又日 一系寺系 竹寺系 ○六日 一系寺
終系 今日より十八日と暖減大念佛 ○八日 泉涌寺一系
系 ○九日 水尾系 泉涌寺系 系 系 の初 ○十日 今日系
安樂花 ○十一日 吉祥會式 花見 ○十二日 今日より
日と天台経系 日表八馬の
お敷之初 今日より十日と善導大師
系 馬山系
中 ○十四日 壬申念佛 系 ○十五日 比良系
武別角田川大念佛 山崎火の初 ○十八日 梁波系

○十九日 暖後新也身拔 ○廿日 在寺仁如弘法新能
之能 女防 ○中の午 本の日に云ふ時ハ
初の午なり 拈香の儀出 子午
亥佛 花開
次第 之儀 拈香 石屋水佛付也

四月

朔日 江別菟麻也 ○二日三日 南都多をの能 ○四日
廣徳也 龜田也 ○八日 灌佛 二門 戒壇堂之儀 ○
九日 法多也之也 ○十四日 南都の法事 ○十六日 三
井寺子園之也 ○十七日 紀州和寺之也 雜參誦
日之山 志照之也 尾列名古 志照之也 ○廿日 勢
田屋也 ○廿一日 志照之也 ○上卯 拈香之也 志照之也

○上辰 八幡也 ○上巳 山科也 江別多也 同堂也
○初申 大原也 平野也 ○初酉 松尾也 ○初亥 大津也
○中子 吉田也 ○中卯 江別八幡也 ○中辰 向日也
○中巳 久世也 ○中午 賀茂也 江別若の也 ○中
申 賀茂也 山王日吉也 山王也 ○中酉 賀茂
也 松尾也 梅也 岡白殿也 志照之也 中
亥 暖後也

五月

朔日 賀茂也 志照之也 拈香 松中も ○二日 賀茂也
賀茂也 志照之也 岡の御也 ○七日 今交也 輿出 ○八日

○十三日 懐州宮内御祭 ○十五日 今宮祭 ○廿日
宮内御祭 ○廿三日 坂本支社祭 ○廿八日 住吉河田入
○晦日 祇堂河内御祭

七月

朔日 廿一と富太坊 ○二日 高嶺の虫拂 初日 ○又日
祇園會波り初 ○七日 祇園會 今日より十日間と祇堂
御祭会 ○十四日 祇堂會 尾列御祭会 竹生御祭会
御後朝天子祭 ○十五日 尾列御祭会 江戸山王祭 三幸に
尾列御祭会 祇堂會 他山王 寺内小倉祇堂會 ○十六日
今日より明日と伊勢會多礼 ○十七日 相國寺懺法 志願

空 廣島祭 ○十八日 祇堂河内入 ○十九日 河内祭
納涼 七月 ○廿日 納涼竹切 ○廿日 納涼と礼の納涼
○廿二日 大坂屋敷祭 ○廿三日 松尾御祭会と能三友
明り又友 ○廿四日 尾定干日坊 ○廿五日 法寺の虫干
三苦虫拂 大坂天後御 栲立祭 ○晦日 賀茂又三月
祇 住吉御祭 江戸屋敷子日祭 ○八月 中安祭 文部局
七月
朔日 賀茂後日坊 ○六日 少野御子洗 ○七日 少野社
壇煤拂 奉納御祭会 并池坊立祀 飛鳥御祭会 在
参入 ○八日 文珠會 ○九日 寺内坊 ○十日 清水子日坊

○十二日 十五日と夜に於て燈籠。○十六日 禁中燈籠。○十
五日 八幡安堵の辰 三升と云ふ夜 甚樂施燈籠 今白
く明日と云ふ燈籠不動子日と云 十七日と云ふ浦上江尻一升
帳。○十六日より火事と云ふ大の字に松尾の燈籠の字ありて
水乃火 松尾燈籠自草より 丸の字ありて
勢別留多きは津と入。○十七日 素多き日と云。○十八日 所
多し出。○廿二日 地蔵と云。○廿九日 燈籠文通

八月

朔日 禁中一 古方より所多きと 松尾燈籠 和泉國
村空^明○三日 堺天祚と云。○四日 少所天祚と云 越前

教習^亂文と云。○八日 江別白燈籠一升帳 山門より下山 ○十五日

伊和八幡と云 長文八幡と云 五系 畑枝と云 八幡放生會 亦
く外と云 七坂江川と云 火 度伏月足 以天深川八幡
と云 寺門と云 後所と云 ○十八日 所と云 亦
と云 ○廿二日 産降と云 子供 ○廿三日 廿四りと云 亦
府と云 ○廿四日 吉田と云 ○彼等會

九月

四日 水燈と云 本帳と云。○八日 泉海と云 別命。○九日 彌
也布福と云 磯湖と云 代所と云 大坂生と云 後
与良大明と云 肥前と云 佐賀と云 ○十日 下多と云

大津口位之案 五條天邪案 山崎口之案 伏見西寺之案
 ○十一日 伊勢寺之案 出陣吉田之案 伊勢河津被命 ○十二日
 右秦案 ○十三日 白川案 ○十五日 宗念案 桑田口案 江戶新田明
 律之三年上之被命 河内之案 寺前小倉案 ○十六日 東
 山尾修案 上谷案 ○十七日 栲引池田昌服漢取案 ○廿日 下京
 半女案 多利案 竹田案 建仁寺門外夷案 整富之案 穰也
 の取 ○廿二日 大坂府麻案 沓案 ○廿三日 右秦案 ○廿四日 園の林案
 本幅案 淨寺案 麻若案 別運整案 ○廿五日 天保流満之案
 田五案 ○廿六日 山案 ○廿七日 栲引池村案 ○廿八日 信濃案 石坂橋
 五高案 ○亦巳午 月防治案 ○首月中 甚盛之案 治方案

世言凡五季八氣三月土極...

又日如... 十月十日 修別金... 十月十日 蓮宗... 十月十七日 内... 十月廿二日 大...

十一月

八月... 十一月十二日 舟也案 ○廿二日 一向... 十一月廿八日...

十二月

十五日ハ懐安居くわんあん○廿二日大徳寺だいとくじ天少忌あまのすけの十九日廿二日
栴尾山せんびさん佛名徑ぶつなみち○晦日 祇堂ぎどうをよりけり 是方こゝより友和ともわ市川いちがわ
乃なり終はつなり ○常とこ外ほか又また條じょう五ご終はつなり 吉田きちだ系けい

は外ほか國くにのの大だい系けい土つち係けいなり 以もつ多た倍ばいなり 是こゝより
甚しつ親しん唐たう浣わん代だい智ち多たををれいれいのの只ただ中ちゆう修しゆなり 是こゝより 是こゝより

紅野系事記



皆貞享五季戊辰三月上澣 雒陽書肆日新堂壽梓

此
卷
係
大
正
十
年
作

入
目
子

玉
文



